

# 《UNE OEUVRE TRONQUÉE》としてのバルザック「村の司祭」とその補完の諸事情について (二)

渡 辺 捨 男

《Le Curé de village》 comme une oeuvre tronquée et le remaniement du roman.

par

Suteo WATANABE

## I

前述のとおり (紀要 16. pp. 219—220), 「村の司祭」の題名である司祭ボネ師が, この小説で「端役」なみのスペースしか占めていないにかかわらず, バルザックはその後二度にわたる加筆の機会に, この人物を小説の主人公に書き改めようとせず, その結果小説の題名と内容とに, はなはだしいそごを生じたまま決定版に定着してしまった事情につき述べたいと思うが, まづこの作品の初版以降の刊行の経緯からはじめたいと思う。

この小説 (現行版) の末尾には, 「パリにて, 1837年1月より1845年に至る」としてされている。起草1837年, 決定版 (FURNE版。紀要16) 1845年という意味である。しかし, この作品のじっさいの発表, 構成の変遷の順序は次のとおりである。

### (1) 初版 (1839年版。紀要16)

初版といつてもこれは「プレス紙」に, 1839年1月から8月まで断続して連載された新聞小説版であって, 当時単行本として出版されたわけではない。近年ブリュセル市からこの復刻版が発刊され, 百数十年ぶりにその内容が見られるようになった (紀要16, 文献欄)。この版のこの作品は現行版の5分の3くらいの分量にすぎぬ。しかしこの版がこの小説の原型であって, その後の加筆の基盤になったものであり, また現行版とは構成がまるでちがうのでここにその内容を摘記したい。

小説は3部にわかれている。

(第1部) フランス中部地方にあるリモージュ市に, ある強盗殺人事件が起り, その犯人である青年は自白しないまま死刑を言渡される。青年はカトリック教徒であるが, 「ざんげ」も行わないまま死刑になろうとする。犯行のさい, 青年はある女性と外国に逃げようとした形跡があるけれども, 彼はその女性につき一切を語らない。リモージュ市の司教は, ざんげを行わないままでの刑死はカトリック教にとり恥辱であるとし, 青年の出身地に教区をもつ司祭ボネ師に使を駆せ, せめてざんげをしてのち死に就くことを教誨するよう命ずる。ボネ師はその命に従い青年をざんげに導き, その後青年の刑は執行される。

(第2部) 同市に住む古鉄商の一人娘であるヴェロニックの生立ち。彼女は成人して銀行家グラランに嫁し, のち市のトップ・レディとして尊敬されるが, その後夫に死別し, 司祭ボネ師の教区である小村に移り住む。

(第3部) 彼女はその村にあつても村民の尊敬を一身に集めるが、のち病臥する。彼女は死に臨んで、とくに乞うて「公開ざんげ」をおこない、さきに不明のままに終わった殺人犯たる青年の愛人は自分であったことを告白し、司教からとくに許されて、安らかに死に就く。(以上)。

すなわち、この版によると、その第1部は司教館の記述にはじまり、次に司教の使者がボネ師を訪れるところ、ボネ師の人物描写、小村の教区や教会のありさまなどがたんねんに描かれ、このあたり宗教的雰囲気はかなり濃厚に出ていて、作者が、とにかく、宗教的テーマと取組もうとした意図が充分うかがわれる。ところが、第2部に入ると物語は一転して一応それと関係のない一女性の年代記と化し、第3部もまたその延長であつて、つまり第2部、第3部にあつては第1部の宗教的雰囲気は、ほんの一部分をのぞき忘れ去られた形になっている。

(2) スヴラン版(単行本。2冊本。1841年刊行)。

初版にたいし、120頁ほどの大きな増補が加えられており、実質的には現行の、さまざまな全集版と大差がないまでになっている。この版では、以下のように初版とは構成がまったくがっている。

(1章)「ヴェロニック」。初版の第2部にあたる。すなわち、ヴェロニックの生立ちから社交界で盛名を得るところまで。

(2章)「タシユロン」。初版第1部の殺人事件にはじまり、司教の使者の出発まで。

(3章)「モンテニヤック村の司祭」。

小村における使者とボネ師との対面。青年への教誨(いづれも初版では第1部)。ヴェロニックの夫の死、小村への未亡人の移住(初版第2部の終りのところ)。内容は大きく異なるが、構成はまるで変っている。

(4章)「モンテニヤック村におけるグララン夫人」。

冒頭の部分は初版第2部の終りの部分だが、それ以下はほとんどこの版で書き加えられた部分であつて、それがだいたい100頁余にものぼる。未亡人の企てる灌漑事業の完遂をその内容とし、それに関連して重要人物数人が書き加えられているが詳細は略する。

(5章)「ヴェロニックの死」。

やはり増補されているが、筋道としては初版第3部とわからない。

この版につきとくに言えることは、第4章で100頁余を書き加えたのはよいとして、その内容が現世の灌漑事業であるため、初版ではまだ見られた宗教的雰囲気が、この作品の後半150頁余においてほとんど感じられなくなったことと、初版でも影の薄かった司祭ボネ師が、これらの「水増し」によつてなおさら端役的な存在になってしまったことである。

(3) 全集版(FURNE版、第13巻、「田園風景」の中)(1845年刊)

スヴラン版と大差なく、この版が現行各全集本の底本になっている。スヴラン版に附せられた「序文」はこの版で削除されている。

## II

この小説の書かれる前後のヨーロッパでは、工業の近代化、農業開発、交通機関の改新など生産の体制が根本的に変革されはじめ、急激に資本主義初期の様相を呈してくる。バルザックはこうした経済事象の動向にとくに敏感であり、またかねて野望もある人物だったので、そういう方面における自己の理想を具現すべく代議士に立つ準備を進め「田舎医師」(1833年)という長篇小説はそのときの選挙を目途として書かれたものとされている。その骨子は、ある知識人が青年時代に犯した不実の行為の非を償うため、山間の僻村にこもって一村を教化善導し、

また小規模ながら村を経済的に開発し村民を更生させるというにある。この小説はそうした不純の動機にかかわらず、舞台を一寒村に限ったため土臭くかえてみづみづしい小説になっており、彼として今まで扱ったことのない新しいテーマにより、まだ粗朴なものであるが、庶民の経済更生といった領域に筆を染め、そのできばえは作者としてはかなり意に満ちたものようであった。その後彼は代議士は断念したが、その頃またはその少し前ごろから、「田舎医師」における世俗の知識人の教化活動に対し、こんどはそれと対蹠的に、高德の聖職者のエヴァンジェリックな活動を主題とする作品、しかもその福音的活動も、「魂のすくい」とどまることなく、「田舎医師」と脈絡する実人生面での経済的救済にまで発展すべき聖職者の諸事蹟を主題とする小説を書きたいと考えはじめたようであって、「村の司祭」の新聞連載のはじまる既に数ヶ月まえ、HANSKA 夫人あての手紙で、「田舎医師」と関連させて、次のようにその意中を洩らしている。

「私は『村の司祭』の冒頭の部分を書きはじめました。この小説は、私の既刊の「田舎医師」と一対を形成するもので、後者が哲学的小説であるのに対し、前者すなわち『村の司祭』は宗教的小説なのです」。(1838年9月17日書簡。 LETTRES A MADAME HANSKA T. I. ÉD. DU DELTA, p. 614)

ところがそうしたせっかくの意欲にかかわらず、この初版においてかような意図や抱負はほとんど実現できずに終わったといえよう。前にふれたように、この版の第1部では相当宗教的雰囲気のみなぎっており、どうやら司祭ボネ師を中軸として物語が展開されそうな姿勢がうかがえるが、第2部に入ると一女性像の描写に作者は深入りしすぎた感がある。さらに第3部に入っても、「公開ざんげ」の場面を除くと一般に事情はかわらず、つまりボネ師は小説の題名にかかわらずあまり登場せず、ヴェロニック中心に叙述がすすみ、彼女の死をもって小説は終りをづげる。いま読者が第1部を読終って第2部にすすむと、ボネ司祭も、カトリック教の雰囲気もどこかへおき忘れられてしまい、ヴェロニックこそがまことの主人公であるような印象をうけるはずである。この小説では第1部とそれ以降とで主人公が入れ替ってしまい、つまり主人公が二人になってくるわけであって、こういう型の小説は構成のくづれたような感を与えずにはおかぬ。

本来、このヴェロニックという女性は、中心人物たるべきボネ司祭に教導される、司祭から見ればひとりの信者であるにすぎないが、「田舎医師」の主人公がかつて非行を行い、のちにそれを告白し、善行によつてその償いをするという道程をこんどはこの女性が主人公のようになって歩むわけであるから、勢いこの女性の描写をおろそかにできない。しかも、宗教的小説がねらいであるからもちろんボネ司祭も表面に出したい、こういう二つの要請に作者は板ばさみになり、つまり二兎を追っている格好で、それを何とか混然とすることができぬままに、時日にも迫られたのであろうが、初版の小説はそのまま終ってしまう。

だいたい、バルザックはカトリック教護持ということを折にふれ力説しているが、いづれかといえば、カトリック教を「人心安定の政治的道具」として、政治的、便宜的に考える立場をとっており、真の「信仰」ということになると、その態度は正直のところかなり動搖的であった節があり、(クルティウス、「バルザック」第10章にあげる多くの例証参照)、また、彼の本心をうちあけた書簡などにとくにそのあとが見られる。(1837年5月31日 HANSKA 夫人あて書簡、前掲書、p. 510) そうした彼が、こうした大作で、カトリック教の事蹟と真正面から取組もうとするに至つたのは、とくに1831年頃以降外部からもいろいろ刺戟をうけたことも

あり、（例えばその頃書かれた数冊の宗教小説など。P. BERTAULT の例証。後出）、また「田舎医師」で俗世人の教化活動を書き上げたので、それに対しこんどは聖職者のそうしたはたらきを書いて、それで一對に揃えようと念願したのにほかならぬようである。しかしこうした性質の仕事が当時の彼に扱いこなせる仕事であったか、これは正直のところ疑問である。それまでに彼はわずかであれそうした世界のことを手がけたことはあるがさほど深く宗教の世界に思いをひそめたことはないはずで、意欲はどうあれそうした世界を描くだけの素地ができていないといえるだろう。それがいまや無雑作にカトリックの世界ととり組もうとしてもドキュメントらしいものの用意もなく準備不足は否めないし、直ちに題材の不足に悩まされることは目に見えていると思われる。その結果はどういうことになったか。初版冒頭のポネ司祭をめぐる情景の描写はかなり考え抜かれたあとが見え、まづ良いとして、第3部での唯一の宗教的シーンである「公開さんげ」のごとき、作者が荘厳なるべき情景を力をこめて描こうとすればするほど、作者だけの感傷に陥っているような傾向があって、そのわりに読者はそれについていきにくいように思われる。また、のちに書加えられた、ポネ司祭がヴェロニックに対してカトリックの教義を説くところにしても、内容はかなり高度であつても、どうやら「教義問答」をそのまま作品にはめ込んだような趣きがあって、迫力を欠き、小説としてこなれているとはいえない。要するに、この小説におけるこうした宗教的情景の描写は、すべて、「意余つて弦ひびかず」といった結果になっていることを否み得ないのである。これに反して、第2部のヴェロニックの章では作者本来の面目があらわれ、かなり楽々と筆が運ばれているのを読みとることができる。カトリック教の事蹟といったものに対しては、作者は表面自信に満ちた態度を示しているが、ほんとうはそうした事蹟となると具体的にいい考えが浮かばなかったというのが真相のようであつて、第2部、第3部にポネ司祭があまり現われなくなったのはそういう理由によるものであろう。そのため書きやすいヴェロニックのことが詳しくなりすぎたということにもそれは通じるであろう。併し、作者が当初から標榜していたのはカトリック事蹟中心ということだったのだから事態は作者の意図に反しているわけで、作者はそうした欠陥を是正すべく次の機会を待つていたことと察せられる。

### Ⅲ

さて、改訂加筆の機会は今もなくおとづれた。翌1840年、スヴラン書肆からこの小説の単行本を出版することに決ったときがそれである。

バルザックの意思としては、そのさい、大幅な増補改訂をおこない、聖職者として異常な偉人であるポネ司祭の「福音的教導」をあますところなく盛込もうとし、この版の「序文」には「この小説の主人公はポネ司祭であつて、この人をめぐってあらゆる人物がそれぞれ所を得るものである」とその意中を明言している。

しかし、じっさいの結果は、いかんながら初版と同じく、作者の意図は完全に裏切られることになり終った。すなわち、この版における120頁にも及ぶ増補は、ほとんどすべてポネ司祭の行動以外のことにあてられ、それもかなり平板で冗長な描写に終始しているにすぎない。こんな増補しか行わないでいて、しかもその「序文」で、ポネ司祭こそこの小説の主人公である」と頑張っている作者の態度は結果的にみるとまるで空虚である。

では、なぜこんなことになったか。

初版以来の筋がきを套習すれば、主人公が二人になるという構成は避けがたく、この補正に当たっても作者はこの点に思切った修正を加えることができなかつたため、そうなることはやむ

を得なかったのである。すなわち、増補にさいして、作者はポネ司祭中心の方にもいろいろ構想を立てていたには相違ないが、実さいは第二の主人公たるヴェロニックの罪の償いとして企画する農業土木事業の進展の方に力が入ってしまい、恐らく作者も予想しなかったほどその部分がふくれ上り、その部分で時日を費したもののようである。こうなったのは反面からいうと、ポネ司祭側のことにこれというよい構想よい工夫が多くは浮かびあがらなかったということが大きにひびいたと思われる。つまり、司祭のことが満足に書ければヴェロニックの方がかくも不自然にふくれ上りはしなかったろうという相関関係なのである。その結果、作者はいわばやむを得ず、ヴェロニックに対する司祭の思想的教導、フェルヴァツシュという犯罪者を善途に導くというくらいのことによって司祭の活躍をすませることになった。しかし、これは当面のところ、その位しか書けなかったということで、宗教中心に書き進めたい意欲を作者が失ったことを意味するものではない。彼はあくまでそうした福音的事蹟を書く意欲をもち、予定の2冊本のスペースが一杯になったので、それを3冊本にしたいと出版者に申し入れたがそれは断られて、やむを得ずそこまで増補を打切らざるを得なくなったのである。(事情は後述する)。

あとでもふれるが、それなら3冊に増やすことがききいれられたとして、どれだけの福音的事蹟が盛込めたか、それが見事にできる見通しがあったか、またかりに書くにしても出版者が我慢できるほどの時日でできたかどうか。すべてそういう点では、今までのできばえと成行きから推して、バルザックに不利な推測をせざるを得ないように思われる。

しかし、最初からカトリックの事蹟中心に大きな増補を行って完べきな宗数的小説にしたかった作者としては、こういうことになり終ったのはいかにも不本意であるとして、その版では初版になかった「序文」をつけ、そこでかなり詳細に自己の立場を弁明している。

それによると、

(1) 小説としてはつねに面白く、ロマネスクであることが出版界の要請であって、宗教、政治、哲学といった方面のことに深入りすることは許されない事情がある。

(2) 著者としてはこんど刊行された2冊本では不足であって、これを3冊本とし、その3冊目でカトリック教を題材として描きたかったが、(1)の事情からそれが許されなかった。

(3) とくに「村の聖体拝領」「司祭の教理問答」「キリスト教の学校、学級」といった章を削らざるを得なかったのは著者として心残りである。

としている。(スヴラン版「序文」)。

しかし、私から見てこの言いわけは大きにくらい。すなわち、(1)の出版界の一般事情のごときは書かない前からわかったことである。それを承知で宗教的テーマと取組もうという意気ごみを作者は示したはずである。いい加減なところで出版事情など持出すなら始めからむつかしいものに取組む資格はないといえる。これは苦しまぎれの弁である。(2)2冊本を3冊本にしてほしいという意図を著者がもっていたことは事実で、増冊につき会談したいと出版者スヴラン氏に書送った書簡が残っている。(1840年9月7日書簡, BALZAC, CQRRESPONDANCE, IV, p. 180)。この会談がじっさい行われたどうかはわからないが、結局著者の希望はかなえられなかった。

しかし、どこをどう加筆するかは作者の自由で、ヴェロニックの方の内容がくふれ上って、司祭の事蹟の方が残ってしまったからといって、期日を控え紙数の予定も立てている出版者に対してそれ以上の増頁を要求するのは作者として虫がよすぎるであろう。(3)についていえば、こうした章がじっさいに書かれた形跡はどこにもなく、これらはすべて「構想」の段階に止っ

ていたようであって、もし悪意をもって見れば作者はまことしやかにこうした章の名だけを列挙したにすぎぬと言われても仕方のない事情にある。前記バルザックの書簡集を編さんしている国立図書館編さん官である R. PIERROT 氏のごときは、その当時バルザックは、「数々の小説の契約などの義務に責めさいなまれ、また疑いもなく、充分の靈感も得られなかったにちがないので、これを（宗教的なテーマ）書くことを断念したものである」と言切っている。（前掲 CQRRESPONDANCE. IV. p. 118）。

翻つて、問題の増補の部分 120 頁についてさらに一言すると、アランや、ベルトーなどはこの小説を作者の傑作のうちにかぞえているようであるが、（文献欄参照）それとは正反対に、とくにこの増補の部分につききびしい批判を加えている人もある。すなわち、前述の KI WIST は「はっきり言ってしまえば、増補のさい、いくらも紙数に余裕があるのに、かんじんの司祭の言動にはふれず、何らそれと関係のない事項を長々と述べているのは、主人公たる司祭を何か口実さえあれば見捨てようとはかっているのであつて、つまり作者の無能力をかくすため、すなわち、「鎧のきずを隠すため」さまざまの挿話を冗長に述べているにほかならぬ。だから司祭にふれない限り作者の語り口はばかばかしくていねいになるのである。宗教的テーマはこの作者の胸中に包蔵されていたにしても、いまひとつ適確なところを欠いていたのではないかと作者の痛いところをつき、また「そもそも、反社会的の性質をもつ『犯罪』というものを、社会のためにつくす善行によって償う、という理は、宗教的というのではなく、政治的なものであろう」と、この小説のテーマ自体に肉迫している。（KI WIST, 「村の司祭」1839年版「序言」。1961年復刻版 X III 頁）。要するに、労したわりには小説に寄与するところの少なかった増補と見てまちがいあるまい。

#### IV

さて、1840年秋、作者はこの加筆をまだ進めつつある最中であつたが、この作品のできばえにつきかなり満足の意を表しながら、その不備な面を十分に認め、10月1日と11月26日との二つの日附を附した手紙で、「いまから20日ほどのうちに、『村の司祭』は出版されます。しかし、それは「片輪の状態のまま (TRONQUÉE) 世に出るのです。……私はこの小説を完全に書きあげることができませんでした。ちようど、「司祭」に関するところだけが欠けて、すなわち1巻相当分だけが残されたままになってしまったのです。併し私はその部分を第2版で書くつもりです。」と明言している（拙稿「序言」紀要 16. 前掲書簡集 <<HANSKA 夫人宛> p. 685）

こうして、この小説は作者自ら片輪の状態と認めたままですべて予定よりはるかに遅れて、翌41年3月に出版された。ところで、それから1年余を経て、彼が「人間喜劇総序」を書いたとき（1842年7月）、その中で彼はこの小説ではヴェロニックが実質的主役であるといつた口吻をもらし、それをとりまく副次的人物 (des figures du secon plan) のひとりとしてポネ司祭の名を挙げていることは注目に価いする。すなわち、これは前述の「序文」でポネ司祭を主人公とするとした宣言と全く矛盾することばであつて、つまり作者は不満ながら、一步後退して、現状ではヴェロニックこそこの小説の主人公であり、ポネ司祭は「端役」にすぎぬことを自ら認めたわけなのである。

さて、その後3年を経て、FURNE 版による彼の全集が出版され、その13巻に、この小説は「田園風景」の一部として出版されることになった。この時のバルザックは40年当時よりもさらに多くの小説をかかえて時間的余裕など全くなく、それでもスヴラン版にいくつかの小修正

を行って発刊したのであるが、問題のポネ司祭の行動を書改めるような大がかりな加筆は到底思いもよらない状態であった。そこで、彼はこの小説の欠陥を自ら指摘したスヴラン版の意義深い「序文」をこの版ではすべて削除してしまった。この「序文」で述べられているような欠陥を補うだけの余裕は当分ないだろうと見たためであろう。

ただ、ここに見落してならない事実がある。それはバルザックという作家の執拗さである。作者所蔵の FURNE 版第13巻の裏の「見返し」の頁に、この小説の「完成時の頁数」として、彼は22と自筆で記入しており、これが今日まで残されている。(1845年刊行の FURNE 原版は今日入手しがたいが、幸いにして、こうした彼の自筆の書きこみを含めたこの版の復刻版が数年前から刊行されている途中であるから、われわれの目でそれをたしかめることができる。)とここで、ここに書かれた22という数字は22 FEUILLETS という意味で、FEUILLET は印刷上の帳数である。1 FEUILLET は16頁。FURNE 版によるこの小説は14 FEUILLETS、すなわち224頁であるが、作者のもくろみとしては将来これを22 FEUILLETS にするつもりだというわけで、8 FEUILLETS すなわち128頁を将来さらにこれに加えたいという決意を示しているのである。この「見返し」には、これこそ完全に「未完」に終わった小説「農民」の完成時の頁数と巻数も記入されているが、それと「村の司祭」と未完という点で同列におかれているわけであって、もちろんこういうことはどうなったかわかったものでないと言ってしまうばそれまでであるが、この点からも、作者がスヴラン版のさい、果たすべくして果さなかった増補のことを忘れず、終局的にはそうした増補を果たそうとする作者の執拗な執念がうかがえると思う。また、この点から見て、この小説は現状のままではほとんど完べきであるとするベルトーのような説は少くとも作者自身の意図とは全く食いちがっていることは明瞭であろう。(バルザック全集<Club de l' Honnête homme 版>第13巻, p. BERTAULT, NOTICE, p. 246 参照)

## 結 語

この小説はそもそも初版から構成上のバランスを崩した小説であった。その後、スヴラン版の刊行にさいし、作者はその構成を正常化すべき意図はもっていたが、R. PIERROT 氏の言のごとく、時間的余裕にも恵まれず、どうやらそれだけの靈感を得ることができなかつたらしく、そのさい行った老大な増補もかえって作品の密度をうすくし、宗教的テーマから益々はなれてしまって、作者の意図に反した結果になりおわった。

これに対し、作者は自己弁護につとめているが、実のところ、失敗に終わった実質的補正を完遂しようとする意欲は絶えず胸中にあつたらしく、死の数年前においてなお作品終局の理想像を FURNE 版の「見返し」にしるしたのだが、意外に早くおとづれた作者の死によってついに意欲は意欲のみに終り、それを果たすことができなかつたわけである。

## 参 考 文 献

Balzac (H. de), La Comédie Humaine (Ed. Conard), (TOME 25) (1952).

《Le Curé de Village》, Version de 1839 (Reprint 1961 Bruxelles).

Alain Avec Balzac. (Ed Gallimard) (1937).

P. Bertault については本文に引用した〈Notice〉参照。

なお、「書簡集」については二巻とも本文で書名を記しておいたのでここに重ねて掲げない。